

21世紀リアリズム文学として Bent Haller *Skyld* を読む

デンマーク語専攻 菊井彰乃

目次

1. はじめに
2. Bent Haller と *Skyld* の成立背景
 - 2.1. 作家 Bent Haller
 - 2.2. *Skyld* の成立背景
3. *Skyld* の作品分析
 - 3.1. *Skyld* のあらすじ
 - 3.2. 主人公と家族関係
 - 3.2.1. 主人公と祖母
 - 3.2.2. 主人公と両親
 - 3.2.3. 主人公と妹
 - 3.2.4. 主人公の変化
4. *Skyld* の考察
 - 4.1. 社会リアリズム性
 - 4.2. 純文学から児童文学へ
5. まとめ
6. 参考文献
 - 使用テキスト
 - 参考資料
 - インターネット資料

要約

本論文では、19世紀の古典作品ヘンリック・ポントピタンの「大きな一日」“En stor Dag”を底本として、現代版に翻案したベント・ハラールの作品『誰のせい？』*Skyld*を扱い、ベント・ハラールが『誰のせい？』に込めたメッセージについて考察するものである。

第一章では、本論文の問題提起について概要を述べている。「死」「いじめ」「ネグレクト」などといった社会の暗黒部分を子供向けに発信している『誰のせい？』は、デンマークの現代社会の問題を子供たちにも考えてもらうように工夫されている。物語を考察していく中で、作者が込めたメッセージを読み解いていくことに加え、世界共通であるこの社会問題に対する作者のメッセージを日本に届けることを目標に掲げた。

第二章では、『誰のせい？』の作者であるベント・ハラールの紹介及び『誰のせい？』の成立背景についてまとめている。『誰のせい？』の成立に関して大きな鍵を握っているのは、デンマークを代表する児童文学者のトーベン・ヴァインライヒである。彼がベント・ハラールに「大きな一日」を元に新しい作品を生み出すことを依頼しなければ『誰のせい？』が生まれることはなかった。そのため、学校教育における古典の立場に関する歴史を示しながら、現在彼が問題視している点を明らかにし、ベント・ハラールに作品の制作を依頼するに至るまでの経緯をまとめている。さらに、ここでは「大きな一日」について紹介している。あらすじ及び作者であるヘンリック・ポントピタンについて示すことで、今後本論文の軸となっていくテーマ(自殺、ネグレクトなど)について、共通性を明示している。

第三章では、『誰のせい？』のあらすじを紹介し、分析を行なっている。主人公と彼の周辺の人々との関係を分析していくことで、彼を取り巻く環境がいかなるものかを考察している。実際に作品中の場面を引用しながら細かく分析することで、自殺やネグレクトの問題がどのように悲劇として彼に降りかかるのかを具体的に示すことができている。また、様々な試練に立ち向かっている主人公に焦点を当てることで見えてくる彼の成長についても分析している。いかに苦しい状況においても力強く生き続ける彼の姿は、同様の状況下にいる子供たちの希望の存在になり得る。暗いテーマを扱う中でも、希望の光を届ける作者の狙いだと考えられる。

第四章では、『誰のせい？』の考察を行なっている。「大きな一日」との共通点や差異にも触れながら、『誰のせい？』を子供向け作品

にするために、ベント・ハラーが凝らした工夫を示している。共通項として挙げられるのは「社会リアリズム性」である。『誰のせい？』の中で問題となっている事柄が、実際のデンマークの社会問題となっていることに加え、底本となった「大きな一日」の時代でも同様の問題があったことを示している。また、ベント・ハラーの作風やこれまでの略歴を踏まえた人物像を示し、現代を代表するリアリズム作家である彼こそが、今回のテーマを扱う適任者であったことをまとめている。『誰のせい？』が成立する上で、「大きな一日」との最大の差異としてあげられるのは、対象読者の違いである。この違いにおいて、最も効果を発揮しているのは「語り手」である。『誰のせい？』の語りで特徴的なのは、「一人称の語り」であることと、「信頼できない語り」であることだと明示している。「一人称の語り」が発揮する効果に関しては、実際の場面を引用しながら、読者が語りである主人公に感情移入し、物語の世界観に引き込まれるよう凝らされた工夫について説明している。「信頼できない語り手」が語りを務める効果については、主人公が語っている事実の曖昧さに言及しながら、読者自身が考えなければならない事柄があることを示した。これらの分析を踏まえ、読者が『誰のせい？』の題名になっている”Skyld”のついて考える必要性を示し、このことに気づいてもらうことこそが、作者の狙いだったのだと記した。

第五章では、以上の分析の総括として、小説『誰のせい？』が果たす役割を示している。1つ目は、トーベン・ヴァインライヒが目指していた、古典文学を現代の子供たちに届ける役割である。2つ目は、子供たちに現代の社会問題について考えるきっかけを与える役割である。『誰のせい？』の中で巻き起こる悲惨な出来事が単なるフィクションではなく、子供たちが自分ごととして捉え、向き合う必要性を作者は伝えているのである。これらの問題は世界共通の課題であることに言及しながら、文学の力を用いて社会に訴える声を、日本をはじめとした世界中の人に聞いてほしいとの筆者の願いを込めてまとめとしている。